



Rotary International District 2800 山形西ロータリークラブ会報

会長：鈴木 浩司 幹事：海和 浩運

地区目標 元気なクラブづくりのために「ロータリーの木」の苗木を植え
ましょう、クラブに、地域社会に、世界に、次世代のために

クラブテーマ 「ロータリーを発信しよう」一人ひとりの感性で

- ◆点鐘：鈴木 浩司 会長
- ◆ロータリーソング：
- ◆司会：武田 岳彦 S.A.A.
- ◆会場：やまぎん県民ホール



Yamagata West Rotary

第**2874**回例会

令和2年**3月9日**(月)

会長挨拶

鈴木 浩司 会長



本日はやまぎん県民ホールでの例会となりました。

開館してからではなかなか体験できないようなことを体験させていただいて、このホールがまさに山形の発信基地になるように、ぜひこれからも頑張ってくださいと思います。我々も改めてふるさとの、この素晴らしい施設を誇りにしたいと思います。本日はありがとうございます。

本日はありがとうございます。

ゲスト卓話



公益社団法人 山形交響楽協会
専務理事

西濱 秀樹 氏

今日、やまぎん県民ホールに皆さまお忙しい中、お集まりいただきまして、誠に嬉しく思っております。このホールについてお話させていただきます。

このホール、先ほどお話ありました2,001席。クラシック専用ホールというのはどういうことかという1つの音が、音を鳴らしたときに、消え入るまでの時間が2秒。これがクラシックにとってベストなんですね。それを日本で最初に実現したのは1982年に大阪の朝日放送が作りましたホールでした。その後サントリーホールが生まれたり、80年代後半からいろんなホールが出てきております。それで、このやまぎん県民ホールは、いわゆる多目的ホールです。クラシック専用ではもちろんありません。クラシック専用ホールよりも、やっぱり重要なのは多目的ホールで、さまざまな催しができた上でこのホールが生きていくこと、使われていくこと、使っていくこと、これが何よりも大事なことです。

山形駅前には山形テルサという800席のすでにクラシック専用ホールがありますので、このやまぎんホールは、もっといろんな手法、手段でホールの魅力、舞台芸術の魅力をお届けする機会、施設になるべきだと考えています。

今日はこの綴帳を皆さんに見ていただくために反響板あたりは組んでおりませんが、12月1日アコースティックなコンサートをやる時には、反響板というのをこの中に組むんですね。大体組むのに40分ぐらいかかりますので、これはもう、やりません。このやまぎん県民ホールの反響板は本当に素晴らしいです。そこで本番に向けて11月29日に山形交響楽団は音を初めてこのホールで出しました。びっくりしました。見るからにいい響きをするホールだなと、私も経験上1回で、なんとなく感触でわかっていました。このオーケストラの世界に約20年おりますので、全国の400から600ぐらいのホール

本日の献立



を見ております。

それで、ここで音を出した感想ですけれども、この2,000席規模で考えた時には、日本でもトップレベルだと思います。この規模で、私の生まれた町、大阪尼崎にアルカイックホールがあって、これもオペラを目指した多目的ホール、これも素晴らしいんです。

もう1つ、音楽の殿堂、大阪国際フェスティバル、日本で初めての国際音楽祭を作ったフェスティバルホールというのがあります。あそこが昔2,700席あったんですね。東京文化会館が2,600席、池袋の東京芸術劇場が約2,000席。規模感のホールと比較した時に、間違いなくこのホールがナンバーワンだと思います。ただ、素朴にこのホールの響きを聞いた時には、間違いなく日本のトップクラスのホールがこの山形にできたと確信しました。想像していた以上にこのホールの響きが美しい。

反響板となると当然組んでいますけれども、外せます。外した上でこの舞台は、3面舞台といって、両脇にこの舞台とほぼ同じ広さの舞台のスペースが用意されております。ここが大事なんですね。この舞台で第1幕をやってる時に、第2幕のセットを横でちゃんと置いておけるかどうか、作れるかどうか。琵琶湖にあるびわ湖ホールであるとか、愛知県芸術劇場の大ホールなんかは、4面舞台と言われてます。こうなると、ウィーンの国立歌劇場とか、世界の最大規模のものができるミュージカルの劇場とかと同一になります。今回、山形では3面舞台を用意できたことは、ほぼすべての大規模な催しに対応できる、恐らく県内でも唯一のホールであろうと考えております。

これだけの設備があって、山形交響楽団のことだけでも言っても、まず大規模なものができるようになります。山響は今45人の編成です。そこに契約奏者を入れて50人でやってるんですね。50名の編成のプロフェッショナル楽団です。

日本のオーケストラは1年間、いわゆるヨーロッパやアメリカのように、シーズンイン、シーズンオフという概念はありません。ヨーロッパやアメリカには、大体9月にシーズンが始まると、毎週末に定期演奏会があって、それから6月ぐらいまでやって、7月、8月はバカンスとなるわけですね。その間、音楽祭があったりします。日本のオーケストラは、恐らく、世界でもっとも過酷な状況で運営しているのが日本のプロ楽団です。

山形交響楽団50人の編成で、年間150回の演奏会をしています。シーズンオフはありません。そこに練習日が加わります。例えば、小さな演奏会。アンサンブルコンサートも年に100回やっています。本番回数としては、トータルすると250回の演奏会をやっていることになってまいります。これは世界一過酷なオーケストラと言っているいでしょ。

ウィーンフィルハーモニー管弦楽団、いわゆるオペラをやるオーケストラでも、年間300日ぐらいオペラ、バレエをやってるんですね、ウィーン国立歌劇場で。オーケストラメンバーは約350人います。ローテーションで交代していけます。われわれはローテーションがありません。なので、250回、150回のオーケストラコンサート、100回のアンサンブルコンサート、常に我々のメンバーは交代なくやってる状況であります。

それで、45人、50人だと、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、そういった古典的な作品

は全部できます。山形テルサにはそういった編成、オーケストラをやるには1番美しい響きなんですね。飯森範親と共にそういったものを作り上げて、山響は今、世界、日本で6位だ。日本に37の楽団がある中で、トップ10の中に入って、しかも6位に位置するオーケストラだという評価を全国紙の音楽専門誌の中でいただくに至ってます。

それでこのやまぎん県民ホールができることで、もっと大きな作品への挑戦ができていく。この7月12日には、仙台フィルとの合同演奏で、この舞台上に100名を超えるオーケストラメンバーが、ブルックナーの作品を取り上げることができる。今までの山形では、我々がお届けすることができなかったものが聞いていただけるようになって、山形に在住の皆さん、それから新幹線の駅前でもありますし、今、このホールを超えるホールは東北にはありません。全国からも人が来るかもしれない。山形交響楽団も、今の定期演奏会は東京からのお客さまが非常に多いんですね。そういった注目を生かしながら、新たな発信をしていく可能性がこれで生まれました。

そしてもう1つ。今まで山形でお届けすることができなかったのが、グランドオペラとグランドバレエです。バレエはたまにテルサさんが市民会館でやられてますけれども、バレエは、オーケストラピットと呼ばれる部分にフルオーケストラが入って演奏するんです。歌のないオペラなんです。でも多くの場合、山形ではテープ音源で演奏をやってます。

本来、作曲家が意図して世界中で多くの人たちの心を打ってきたのは、オーケストラピットにオーケストラが入ってのグランドバレエなんですね。オペラもそうです。今年10月にはトゥーランドット、プッチーニの大作「誰も寝てはならぬ」、このオペラは3時間くらいかかります。そういうオペラも、今お話したような3面舞台があるので、山形でも皆さんにお届けすることができるようになる。

皆さんに今日、前から4列でお座りくださいとお願いしたかという、今からこの舞台の方の協力で、オーケストラピットを体験していただこうと思います。オーケストラピットっていうのはどんなもんなのかというのを、皆さんのご協力で、体験いただきます。長い人生の中でなかなかできることではございませんので、たっぷりとお楽しみいただければと思います。

今お話ししたようにこのホールは日本でも誇るべきホールです。もう一言だけ付け加えますと、日本は世界ナンバーワンのホール大国です。これだけの市町村に、まともなホールがある国っていうのはほかにございません。世界の人たちが日本のどんな小さな町に行っても、素晴らしいホールがある。日本でトップレベル、イコール世界でトップレベルっていうことなんです。そういったホールを我々は持って、これから山形の魅力も発信し、この素晴らしい舞台にたくさんの方にお越しいただいて盛り上がりにつなげていきたい、そんな気持ちでございます。文化っていうのは人をつなげ経済を動かしていきます。多くの人たちを招き入れることができるし、その魅力を世界に発信することもできる。そういった可能性を皆さんと一緒にこのホールで作っていければ、そのような思いでこれから我々も運営にあたってまいります。どうも今日はご清聴、ありがとうございました。

オリエンタルカーベット株式会社
代表取締役社長

渡辺 博明 氏



皆さまこんにちは。緞帳、初めてご覧になった方、今日のぐらいいらっしゃいますか?ありがとうございます。これが緞帳「紅-BENI」、幅20メートル、高さ13メートルの大きさで、重さが1,500キロあります。歌舞伎座は28メートルの6.5メートルあります。ですから、この緞帳自体は、歌舞伎座の形の倍あるという形で、だいたい歌舞伎座の緞帳は1枚1,000キロぐらいですね。そういうことから言うと、非常に大きさも大きいし、重さもあるということで、これ自体は本当に3枚緞帳を手縫いで縫い合わせて、廃校になった山辺中学校に、持ち込むときは3枚分割で持ち込んで、中で作業して1枚で合わせて、そこから人力でここまでトラックに積んで持ってきたという形になります。

この緞帳、山形銀行様でこの緞帳のコンセプトというのをきちっと説明した文章がありますので、ここをまず正確に読ませていただきます。これは奥山清行さんがこの緞帳をデザインした思いで、書かれた文章ですので、説明させていただきます。『山形を象徴する紅花と自然をモチーフに、赤をメインカラーとして郷土の過去・現在・未来を色鮮やかに表現しました。月山の雪や絹などの白から、紅花の黄色が太陽のごとく光り、それが染料に純化された深紅は東北の祭りや秋の収穫を表し、オシドリやアケビやもつてのほかの紫に溶け込んで行く。これら山形の豊かな自然と文化を表す色たちが、グラデーションを通して1つの世界観を表しています。言うは易く行うは難し。今回の緞帳のスケールでこれらを表現することは技術的にも大変困難で、世界に誇る山形緞通のぼかし技術があつてこそ実現可能となりました。太古から愛されてきた豊かな自然を背景に、歴史ある現在の山形文化が生まれ、東北の赤い魂を世界に発して行く未来。県民の皆さまには見るたびに新しい発見があるやかもかもしれません。また、この地を訪れた方々にも、暖かい山形のおもてなしを感じていただければ幸いです』ということです。

この緞帳の世界って非常に狭い世界でして、緞帳の本場は、関西の綴織なんですね。川島織物さん、龍村美術織物さんという本当にすばらしい会社があつて、鶴岡の、千住さんのウォーターフォール「水神」は綴れでは表現できなかったんですね。もちろん公共の建物ですから、プロポーザルという形で、千住さんが我々を指名したという形だったんです。山形県民会館のような大きな緞帳は、日本でも数少ないということで、この建物ができたときから、本当に関西の業者さんも、やっぱり鶴岡の二の舞になってはならぬということで、営業をかけてました。我々もいくら地元山形だからといって、山形に発注できるなんていうことは、当然、今の公共建築の中ではないわけで、競争になったら、オール山形で戦おうということで、奥山さんには「もし、そういう場合は、一緒にデザインを組んでもらえませんか?」と3年前に話をしたの

が、この緞帳のスタートです。

実際、非常に光栄だったのは、山形銀行様が県民会館の緞帳を寄贈されるということを経長川頭取のほうからもお話を受け、山形銀行さんからも、デザイナーとしては奥山清行さんでというお話がありました。今回、難しかったのは、贈り主である山形銀行様のデザインに対する考えと、受け手側である山形県様の受け手側の思っているのがありました。デザイナーと贈り主と受け手側とお三方の意向を確認しながら進めるっていうのが、結構、時間がかりました。山形銀行様からは「紅花でいきたい」その意向が明確になってきたんです。暖色系で紅花っていうデザイン性は、自ずと出てきた中で、もう1つこだわりが「やっぱり山形県全体の緞帳なので、そこに山形県の真ん中である月山が欲しい」と吉村知事がつておっしゃったんです。奥山さんは、それを具象化すると非常にチープなものになるので、白をどこかに使いたいということで、白が入っているんですね。山形県を中心である月山の白というのがよく込められたものなんですね。

この緞帳、何色くらいの色数を使っていると思われませんか?鶴岡の「水神」、あれだけこまいんですが、あれは77色です。そして、「紅-BENI」は182色の色数を使っています。緞帳のベースもグラデーションがかかっている、紅花の花自体もグラデーションがかかっています。グラデーション、グラデーションの組み合わせで表現されているということで、元々は177色でスタートしたのが、182色に増えたっていう形だったんです。

昨年の1月から染色が始まり、山形の紅花を使って欲しいという要望があつたんです。花笠の紅餅で、1キロこれ5万円ぐらいするんです。実際使ったのは20キロ。100万円ぐらい使ったんですけど、結局、この紅餅から取れる深紅っていう色は、ちょっとびつとしか取れなくて、20キロの紅餅からは20キロの真っ赤っかな色しか取れないんですね。あとは黄色とか。紅餅を溶かして、脱脂綿に1回色を取り込んで、そしてこれを毛糸に移し込むみたいな作業を毎日、毎日、1キロずつ20回、職人さんが寒い中、色を取るところからスタートしたんですね。ここの花、ちょっと色濃いところありますね。これは、山形の紅餅を使って、紅花反応が起きるんです。ご存知のように紅花っていうのは、非常に退光しやすい、光、移ろいやすい色ってことで、化学染料で染めた上に紅花の色を乗っけるというやり方をして、ここに山形の紅花を使ったという形にしています。春先になって織りが4月からスタートして、8月までの5カ月近くかかるんですけど、先ほど言いました3分割して作ります。これを作ってみて、分からなくなってくるのは、微妙なところの色の差です。ずっと1日職人さん織っていると、色が分からなくなってくるんです。やっぱり色を間違えないで打ち込むっていうのは、非常に職人さん達は大変だったと思います。

なおかつ、この3分割でできた緞帳を山辺中の体育館に持って行って、ちょうど8月、体育館の中は35度ぐらいになるんです。ただ、体育館の窓を開けてしまうと、鳥が入ったり、何か入ったりして、例えば、こういった白いところにおしっことかされてしまうと、色がやっぱり取れなくなってしまう危険があるもので、窓を締め切った35度の暑い中で、6人の専門の職人たちが表面を削ったり、頑張ってくれたお陰でこの緞帳ができあがったんですね。

ちなみに、どこでつないであるかなんてわかりますか?本当

に手縫いで縫ってあります。でも、見ていただくと分かるように柄もズレなくてきちっと縫えるというのは、絨毯職人さんの技術なんですね。

緞帳は、これからいろんな演劇とか、あるいは歌謡ショーみたいなものが始まる時に、ぜひ見て楽しんでもらう、それが緞帳の仕事かなって。今ご覧になっていただいて、紅花の柄とベースのグラデーションが途中で反転してる所は、カメラできちっと撮るとほんと全部グラデーションが移り変わっている様子が見られます。これから皆さんに楽しんでいただける緞帳として、かわいがっていただければと思うところです。

あと先ほどの入口に「最上川」という絨毯があります。あ

れも小松先生の最後の作品だったんですけど、絨毯も靴で踏んでいただくっていうのは、この県民ホールに来られた方が足元から始まるいろんな催し物を楽しんでいただける、そういうお手伝いが、我々の絨毯がさせていただけるのであれば、本当にものづくり冥利に尽きるなと思ったところです。

今日は本当に西ロータリー様の貴重な例会のお時間をいただきまして、ありがとうございました。先ほどありましたけど、この椅子も本当に素晴らしい椅子です。この上で立たれる方、こうしてみると2,001人観客の方入られますけど2,000人がいるっていう圧迫感を感じないっていうのも、このホールの素晴らしさだと思って、拝見したところでした。どうもありがとうございました。



<本日出席・修正出席>

	会員総数	出席会員数		会員総数	出席義務会員数	出席会員数	出席率
本日出席 (3/9)	94名	59名	修正出席 (2/15)	94名	87名	81名	93.10%
メイクアップされた会員	(イブニング) 安部 弘行 (山形東) 半田 稔、伊藤 歩、伊藤 義彦						